クリスマス、その特別な一日をサントリーホールで。

text by Kishiko Maeda

クラシックのコンサートに行く日。それは目が覚めた瞬間から特別な空気に包まれる一日。

＊ ＊ ＊

ベッドを出た瞬間からなぜだか背筋がしゃんとして、いつもより少しだけ所作が美しくなる気がする。単純だと笑われてしまうかもしれないけれど、日常の延長線上にある、キラリと輝く非日常こそが今日という日。そう思うと、この単純さだって悪くない。

クローゼットから「コンサートに着て行こう」と考えていた、とっておきの一着を取り出す。

いつもよりも華やかなものでも良いし、ぐっとシックなものでも良い。気負わずリラックスして聴くための、こなれたカジュアルスタイルだって当然悪くない。幼いころ、遠足の日の朝に目を輝かせながら準備をしたように純粋な気持ちで準備すれば、どんな格好も今日を彩る装いにふさわしい。

＊ ＊ ＊

髪を梳かしたら丁寧なベースメイク。アイメイクにハイライトにルージュ。靴やコートも吟味して、軽やかな足取りとともに「一年を締めくくる最高の一日になる」と心の中で唱えながら家を出る。

余裕を持って到着するだろうからカラヤン広場でお茶でもしようか。それとも六本木を軽く散歩でも？

＊ ＊ ＊

サントリーホールでのプログラムは、チャイコフスキーの『くるみ割り人形』にムソルグスキーの『展覧会の絵』など。

サントリーホールとも深い関わりのあるヘルベルト・フォン・カラヤンも十八番のひとつとしたこれらの楽曲は「あまりクラシック音楽に詳しいわけではないけれど」という人――もちろん熱心にクラシック音楽を聴き込んでいる人も――演奏の美しさや愛らしさに酔いしれられるものばかり。

＊ ＊ ＊

奇しくも『くるみ割り人形』は、とあるクリスマスの日のお話。サブスプリクションで手軽に聴ける、過去の名演を聴きながら会場に向かうのも良いかもしれない。

＊ ＊ ＊

「小序曲」を再生して、淡い息を吐き、街を見渡す。なんだか愉しいことが起こりそうな予感に駆け出したくなる。

「行進曲」でメトロの階段を駆け下り、「金平糖の精の踊り」に耳をすませながら過ぎゆく駅を眺める。

「ロシアの踊り（トレパーク）」が始まるころには、どうにも胸が逸って「アラビアの踊り」で少しだけ深呼吸。お茶目な「中国の踊り」や、誰しもが聞き覚えのある「葦笛の踊り」に微笑んだら、あっという間に夢の世界はフィナーレ。

＊ ＊ ＊

優美で柔らかな三拍子に身をゆだねる「花のワルツ」。演奏によって感じた情緒をじっくりと抱きしめ、かけがえのないひと時を想えば、大好きな人に向かって自然と口にしたくなるはず。

「いつもありがとう、メリークリスマス！」

＊ ＊ ＊

サントリーホールに向かう道のりも、ヴィンヤード（ぶどう畑）形式の客席であるがゆえ等しく美しく私たちにそそがれる音楽の素晴らしさも、幕間にホワイエで喉を潤す1杯も、世界がうんと煌めいて見える終演後の浮遊感も。

それらは輝ける思い出として、これから先も記憶に刻まれることでしょう。

＊ ＊ ＊

クラシックのコンサートに行く日。それは眠りにつく瞬間まで特別な響きが終わらない一日。

前田紀至子 *Kishiko Maeda*

1985年4月5日生まれ。フェリス女学院大学文学部卒業。新潮社nicola専属モデルや、光文社JJ編集部でのライターを経て、美容やライフスタイルを中心にしたエッセイやコラムを雑誌やウェブサイトに寄稿。軽やかな視点と文体が幅広い世代から支持を集める。マガジンハウスのHanako.tokyoやモリモトのSUMAUにて好評連載中。ヘルベルト・フォン・カラヤンと同じ誕生日が自慢。

Hanako.tokyoにて執筆中! 前田さんの記事はこちらから➡